

## カレン族は本当に植民地時代に山を下りたのか？

国立民族学博物館 加藤昌彦（かとうあつひこ） 1999/03/14 AA研

**問題提起：**カレン族がイギリスの植民地時代に山地から平地へと居住地を移したとの説明がなされることが多い。この説の妥当性についてカレン語研究の立場から考えてみたい。

### 1. カレン族が英領時代に山を下りたとする説

植民地時代にカレンが平地化(殊にデルタ)したとする説明は様々な文献に見られる：

■大野(1969:365)：「こうしたカレン人の生活に、18世紀から19世紀にかけて、一つの大きな変化が起こった。彼らは先祖代々抱いていたビルマ人への恐怖感を棄てて、徐々に平地へと降りはじめたのである。このようなカレン人の平地進出化を促した最大の原因は、3度にわたって行われた「ビルマと英国との戦争」であり、その結果としての「ビルマの英領化」にあった。」(典拠の1つとして Stevenson [1945:19])

大野 (ibid.)は、脚注において、「この頃 (18~19c;引用者注) ビルマを訪れたヨーロッパ人は、たいていカレン人のことにふれており、カレン人たちは当時既に平地への進出を行っていたことがわかる。」と述べている。つまり、英領化以前からカレンが平地化していたことを否定しているわけではない。ただし、イギリスとの戦争が平地進出を促進した最大の原因であると言っていることから、それ以前の平地進出についてはごく小規模だったと見なしていると思われる。

■飯島(1974)：山地民→19世紀におけるキリスト教化（キリスト教宣教師による反ビルマ感情の煽りたて）→反ビルマ武装闘争

「カレン族とビルマ人の関係を、タイ国やラオス、その他の東南アジア諸国における山地民と平地民との関係から類推すると、一部では両者の間に多少とも敵対感情が存在していたにせよ、全体としては、直接の利害に抵触しない限り、お互いに"無関心"であったのではないかと思われる。(p. 119)」

「たとえば、(イギリス人は)カレン族がモン族やビルマ人に"奪われた"土地を"回復する"と称して、Irrawaddy デルタの低地ビルマや Tenasserim 地方に、山地から多数のカレン族を移住させた。」(p.122; Thomas [1950:29]に依拠)

■速水(1992)：「山地にありながらビルマ族やタイ族をはじめとする平地社会との関係の歴史が長く、この歴史的相互関係を抜きにカレン文化を動的にとらえることはできない」(p.272) (その通り。ただしモン族との関係も考慮に入れるべき)

「19世紀に入ってイギリスによるビルマの植民地化が進むと、多くのカレンが平地へ移住した」(p.274)

■Stevenson (1945:19) "During the peaceful years of the British occupation many of them, abandoning their ancient fear of the Burmans, came down to live in the plains, especially in the Irrawaddy delta and the Tenasserim division."

■Thomas, W.L and J.F. Embree (1950:29) "Migration to the delta has been under British protection during the past century."

## 2. カレン族の居住地

1983年のビルマ国勢調査

イラワジ管区	カレン族人口102万人（全体の20.4%）
	うち仏教徒 72.8%, キリスト教徒 26.0%
カレン州	カレン族の人口36万人（全体の57.1%）
	うち仏教徒 84.7%, キリスト教徒 ?%

このように、デルタ地帯には極めて多くのカレン族が居住している。

## 3. <考察1>カレン語の東西方言の差異

ビルマで話されているカレン語の方言は、スゴー・カレン語、ポー・カレン語ともに、東部方言と西部方言に大きく分けることができる。東部方言は主にカレン州・モン州・テナセリム管区などで話されている方言であり、西部方言は主にイラワジ・デルタで話されている方言である。

### 3. 1 東部スゴーと西部スゴー

スゴー・カレン語の場合、東部方言と西部方言の差はポー・カレン語ほどは大きくない。コミュニケーションに支障をきたすほどには違わない。語彙も基礎語彙レベルではあまり異ならない。しかし顕著な違いがある。それは声調の違いである。

・声調の対応 (Plain Syllables のみ)

東部	/55/	/33/	/11/	/51/
				/
西部	/55/	/33/	/11/	

全体的に見て東部スゴーと西部スゴーは非常によく似ていると言ってよい。しかし、母語話者が「訛り」を観察することによって出身地（東か西か）を直ちに当てられるくらいの違いがあることは無視できない。（また、初対面の東西の出身者がスゴー・カレン語で話すと、困惑を感じるものが多少なりともあるという）

### 3. 2 東部ポーと西部ポー

ポー・カレンの場合、加藤(1995, 97, 98)でも述べているように、東部方言と西部方言の違いは大きく、互いの方言を聞き慣れたもの同士でなければほとんど通じないと言ってよい。その原因は、発音の違い、語彙の違い、文法の違いなど様々なレベルにわたっている。東西のポー・カレン語が通じず、ビルマ語に頼るしかないことを、Purser and Saya Tun Aung (1922)が報告している："These dialects are sufficiently diverse in pronunciation and vocabulary to make Karens who only know one resort to Burmese when they wish to converse together." (Purser 1922:172)

(a)子音の違い

東部	c	ch
西部	s	sh

(b)母音の違い (単純母音の対応のみ挙げる。括弧内は単純母音以外のもの)

東部	i	y	u	I	U	e	@	o	E	a	O
			\						\		\
西部	i	y	u	v	e	o	(e')	@	(o')	E	(ai) a O (au)

(c)声調の違い(Plain Syllables のみ)

東部	/55/	/51/	/22/	/11/
		/		
西部	/11/		/51/	/55/

(d)語彙の違い

- ・意味のずれのあるもの

東部 /caiN55/ 「歩く」 : 西部 /ga'55pha'55/ 「歩く」  
/saiN11/ 「走る」

- ・同源ではない語彙を用いるもの

東部 /k@ml@N51/ 「井戸」 : 西部 /thi11ph@N55/ 「井戸」

基礎語彙の対応 (崎山[1996:234]掲載の Gudschinsky の 200 項目リストによる) を以下に示す。cognate な語彙であっても発音が相当異なることに注意されたい。カレン語形式はすべて発表者のデータによるものである。

(声調表記 : :[55] =[22] \_[11] .[51] )

	東部	西部		東部	西部
1.all	laU:cheiN.	th@:'@lou'	2.and	de=	l@:
3.animal	ch@phU:	sh@pho_	4.ashes	peiN.khla:	phleiN:kha_
5.at	l@-	l@-	6.back	khloUN.	khlouN_
7.bad	'@N_	'@:	8.bark	mO_	maN:
9.because	'@khU:coN_	'@cauN:	10.belly	goUN=phoUN.gou'phoUN_	
11.big	dU:	do_	12.bird	thU:	tho_
13.bite	'aiN:	'aiN_	14.black	T@N.	T@_
15.blood	TwI:	TwI_	16.blow	li_ gE.	li: gai_
17.bone	ch@xwi:	sh@xwi_	18.breath	Ta:	Ta_
19.burn	mI: 'aN:	me_ 'aN_	20.child	phU:	pho_

21.cloud	ch@'@uN:	sh@'@_	22.cold	khleiN:	khleiN_
23.come	gE.	gai_	<u>24.count</u>	na:	twa'
25.cut	ma_the:	ma: the'	26.day	mu=ni_	mv.ni:
27.die	Ti.	Ti_	28.dig	kh@uN:	kh@_
<u>29.dirty</u>	ci.ca:	Ta'lo_	30.dog	thwi:	thwi_
31.drink	'O_	'au:	32.dry	xaiN.	xaiN_
33.dull	laN_lai_	laN:lei'	34.dust	phai:mu:	phei'mu_
35.ear	na=	na.	36.earh	gaN:khU:	gaN_kho_
37.eat	'aN:	'aN_	38.egg	'@di:	'@di_
39.eye	me:Ta:	me'Ta_	40.fall	laN_	laN:
41.far	jaiN_	jaiN:	42.fat	TU:	To_
43.father	pha=	pha.	44.fear	Ta_mE:	Ta'mai_
45.feather	'@chon:	'@shauN_	46.few	sa_	sya:
47.fight	daU_	d@w'	48.fire	mI:	me_
49.fish	ja:	ja_	50.five	jE=	jai.
51.float	phlO: thaN:	phlau_ thaN_	52.flow	laN_jwa_	laN:jwa:
53.flower	phO.	phau_	54.fly	ju_	ju:
55.fog	chaN_	shaN:	56.foot	khaN:	khaN_
57.four	li=	li.	58.freeze	×	×
59.fruit	ch@Ta:	sh@Ta_	60.give	phI:laN_	phe_laN_
61.good	gI_	ge:	62.grass	naN:	naN_
63.green	jI.	je_	64.guts	xwai:	xwei'
<u>65.hair</u>	khU:Tu:	kho_Twi_	66.hand	cu:	su_
67.he	'@we.	'@we_	68.head	khU:	kho_
<u>69.hear</u>	choN.na:	kho'na_	70.heart	Ta_	Ta'
71.heavy	x@N.	x@_	72.here	le.jo_	l@jO:
73.hit	ba:	ba_	74.hold	ma_nI=	ma:ne.
75.how	be.TI:To_	p@Te_	76.hunt	loN_	lauN:
77.husband	wa_	wa:	78.I	j@_	ja:
79.ice	×	×	<u>80.if</u>	'e_	bo:
81.in	l@-	l@-	82.kill	ma_Ti.	ma:Ti_
83.know	Tl:ja.	Te_ja_	84.lake	noN:	nauN_
85.laugh	ni=	ni.	86.leaf	TeiN:la:	TeiN_la_
87.leftside	cI:	se_	88.leg	khaN:	khaN_
89.lie	mi.naN_	mi_naN:	90.live	'O:	'au_
91.liver	T@uN:	T@_	92.long	thO.	thau_
93.louse	T@uN:	T@_	94.man	'@khwa.	'@khwa_
95.many	'a:	'a_	96.meat	'@ja:	'@ja_

97.mother	mU=	mo.	98.mountain	khU:lon_	kho_lauN:
99.mouth	no_	no.	100.name	'@meiN_	'@meiN:
101.narrow	'eiN:	'aiN_	102.near	baU_	bou'
103.neck	kho:	kho'	104.new	TaN.	Tan_
105.night	na_	na:	106.nose	na.	na_
107.not	'e:	'e'	108.old	li_	li:
109.one	l@-	k@-	<u>110.other</u>	'@xa=xoN_	gu:ga_
<u>111.person</u>	phloUN_	p@sa:	112.play	lo:kwe_	lo'kwe:
113.pul	caU_	cou'	114.push	chaN:	shaN_
115.rain	ch@N_	sh@:	116.red	wO_	gau:
117.right	ba:	ba_	<u>118.rightside</u>	'@xo_	'@thwe_
<u>119.river</u>	sU:khlo:	thi_khlo'	120.road	ph@N_Ta_	ph@:Ta'
121.root	'@wi=	'@wi.	122.rop	phli_	phli:
123.rotten	'u:	'u_	124.rub	thaU_	thou'
125.salt	thi.la:	thi:la_	<u>126.sand</u>	p@ti_	me'
127.say	cai_	sei'	128.scratch	khwa_	khwa'
<u>129.sea</u>	ma.ch@mai_	paN_lE_	130.see	jU=	jo.
131.seed	ch@khli.	sh@khli_	132.sew	cha_	sha'
133.sharp	'aiN:	'aiN_	134.short	phy:	phy_
<u>135.sing</u>	ma_tha_khU:	Ta"wi_	136.sit	chi.naN_	ch@_naN:
137.skin	phai_	phei'	138.sky	maU_khU:	mou'kho_
139.sleep	mi.	mi_	<u>140.small</u>	pI.	shei'
141.smell	n@N.	n@_	142.smoke	mI:khu:	me_khu_
143.smooth	phli.	phle_	144.snake	wu=	gu.
145.snow	×	×	146.some	l@naN_naN_	k@naN:naN:
147.spit	thU:phli_	tho_phlei'	148.split	ma_thI:pha=	ma: the.pha.
149.squeeze	bai_	bei'	150.stab	che_	she'
151.stand	chi.th@uN:	sh@:th@_	152.star	sa:	sya_
<u>153.stick</u>	le:	'@bauN:	154.stone	loUN=	louN.
155.straight	loN_	lauN:	156.such	'aN:chaU_	'aN_shou'
157.sun	mu=me:	mv.me'	<u>158.swell</u>	ka_thaN:	pho_thaN_
159.swim	ja= thi.	ja. thi_	160.tail	'@mI=	'@me.
161.that	nO:	nO_	162.there	le.'o_	l@'o:
163.they	'@Ti:	'@we:Ti_	164.thick	taN:	taN_
165.thin	b@N_	b@:	166.think	choN.moN:	shauN:mauN_
167.this	'@jo_	'@jO:	168.thou	n@_	na:
169.three	T@N_	T@:	170.throw	khwai:	khwei'
171.tie	c@N_	s@:	172.tongue	phli_	phle:

173.tooth	mE:	Twa_	174.tree	th@uN:	th@_
175.turn	kh@lai_	khe'	176.two	ni.	ni_
177.vomit	pjo_	pjo'	<u>178.walk</u>	caiN:	ga'pha'
179.warm	l@N_	l@:	<u>180.wash</u>	Ti.ja_	'aN_shv_
181.water	thi.	thi_	182.we	h@_	Ba:
183.wet	cO:	sau_	184.what	ch@nO:	m@nO_
<u>185.when</u>	si_sl:	'@kha_p@Te_	186.where	khO.IE.	kh@lai_
187.white	'wa_	bwa:	<u>188.who</u>	phloUN_	m@pa:
189.wide	IE=	lai.	190.wife	ma.	ma_
191.wind	li_	li:	192.wing	'@dai_	'@dei'
193.wipe	thaU_	thou'	<u>194.with</u>	de=	l@-
195.woman	'@mu:	'@mv_	196.woods	meiN_la:	meiN:la'
197.worm	chaN.k@le:	shaN_k@le'	198.ye	n@Ti:	n@Ti_
199.year	neiN:	neiN_	200.yellow	baN_	baN:

ここで試みに言語年代学の方法を用いて東西方言の分岐年代を計算してみる。79, 58, 145の3項目は共通形式がそもそも存在しなかったと考えられ、また、2と194は同一形式なので、考慮に入れた項目数は196個。このうち、同系ではない形を含む項目は24個である(項目番号と英語名を斜字体にし、下線を引いたもの)。したがって全体としては196形式のうち172個(88%)が一致する。発表者は言語年代学をまったく信用していない。しかし、あくまでも目安として、この数字をもとにポー・カレン語が分岐してからの年数を計算してみると $[t = \log c / 2 \log r]$  (tはt千年。200語リスト使用のため $r=0.81$ 。また、 $c=172 \div 196 \approx 0.88$ )  $\therefore t = 0.303$ ] (崎山 *ibid.*を参考)、303年となる(1999-303=1696)。この数値を信用するならば、1600年代と1700年代の間頃に現在の東西ポー・カレンが分岐したことになる。ただし、これはあくまでもまったくの目安に過ぎないことを強調しておきたい(繰り返すが、私はこの数値を信用しているわけではない)。

(e)文法の違い

東部	j@-	'aN:m@N.	'@we.	II_
	1sg	命じる	3sg	行く
西部	j@-	'aN_m@_	le:	'@we_
	1sg	命じる	行く	3sg

cf.	1824-1826	第一次英緬戦争
	1826	アラカン地方・テナセリム地方を割譲
	1852	第二次英緬戦争(下ビルマー帯が英領に編入)
	1885	第三次英緬戦争
	1886	ビルマ全土が英領インドへ併合

◆方言の違いから言えること

少なくともポー・カレンに関して言えば、英領化のはるか以前に既にデルタに進出して見ることが自然である。「はるか以前」というのがいつだったかについては明言できないけれども、東西方言が意志疎通不可能であることを Purser が指摘したとき、第一次英緬戦争勃発から数えても100年足らずしか経っていなかった。100年足らずの間に、2つの方言がほとんど通じないほどまでに変化したと考えるのは不自然である（あまり適切なたとえではないが、明治30年頃に日本人がいくつかに分岐したとして、その子孫同士が現時点において日本語で会話がまったくできないことを想定されたい）。たとえ英領時代に山地からデルタへの移住があったのだとしても、デルタ地帯におけるポー・カレンの集団を成立させた母体はそれよりずっと以前にできあがっていたと見るべきである。なぜなら、もしデルタのポー・カレンが英領化以降の移住者を中心として成立したのなら、東西の方言はもっと似通ったものになったと考えられるからである。一方のスゴー・カレンについては、現時点で観察される東西方言の違い程度であれば、平地化が英領化以降に起こったと考えることも確かに不可能ではない。けれども、この事実をもってスゴー・カレンが英領化以降にデルタへ進出したことの根拠とすることはできない。なぜなら、スゴー・カレン語の東西方言の差異が小さいことの原因は、シッタウン河付近に分布上の大きな空白地帯のあるポー・カレンとは異なり、東西方向に連続的に分布しているために極端な方言の分化が妨げられたという可能性に帰することができるからである。

4. <考察2>カレン語におけるモン語の借用語

Luce(1985)によれば彼の約千語の比較リストのうち60以上の単語がモン・クメール系（ほとんどがモン語）語彙と関連づけられるという。モン語からのものと思われる例を掲げる。（カレン語形式は発表者のデータ。モン語形式は坂本(1994)『モン語辞典』AA研による）

	EASTERN PWO	EASTERN SGAW	MON
兔	p@dE11	p@dE55	haʔtai
町	doUN11	du55	dəŋ
島	ko'11	kO'55	koʔ
村	t@waN51	t@wO55	kwan
門	paiN11t@raN51	pE55trO55	paŋtraŋ
箱	t@la51	t@la55	kaʔla
文字	lai'55	li'11	lɛc
船	k@baN11	k@bO55	kaʔbaŋ
波	l@pO11	l@pO55	lɛəʔpɔh
休憩所	T@ro'55	T@ro'11	sɔp

これら語彙の多くはポー・カレン語とスゴー・カレン語の間で、固有の語彙と同じ音韻対応を示す。従って、これらの語彙が借用されたのは、ポーとスゴーに分岐する以前だったと考えられる。(最近のモン語やビルマ語などからの借用語はこのような音韻対応を示さない)

ポー・カレン語 (東部) とスゴー・カレン語 (東部) の声調対応

	*1	*2	*3
*有声	Pwo 11 ; Sgaw 33	Pwo 22 ; Sgaw 11	Pwo 55' ; Sgaw 11'
*無声無気	Pwo 11 ; Sgaw 55	Pwo 55 ; Sgaw 51	Pwo 11' ; Sgaw 55'
*無声有気	Pwo 51 ; Sgaw 55	Pwo 55 ; Sgaw 51	Pwo 11' ; Sgaw 55'

Bauer(1992)によればカレン語におけるモン語的要素は文法的意味を表す語彙にまで及ぶ。また、逆に、15世紀の Middle Mon にはカレン語からの借用語と考えられる助辞もあった。(そもそもカレン語が SOV から SVO になったのもモン語の影響である可能性がある cf. Matisoff 1991)

疑問を表す助辞 Pwo Ra51 Sgaw Ha55 Mon ha

◆上で見たような事実から、カレン族はスゴーとポーの分岐が起こる以前から既に平地民族モン族と交流していたと思われる。加えて、南部ビルマはビルマ族が進出してくる以前は蒙の勢力が大きかったことを考えれば、カレン族とモン族との関係は相当に密だったのではないか。モン語との接触の痕跡は、カレン族が昔から平地化していたことの証明にはならないが、少なくとも、平地民族のモン族との少なからぬ交流があっただろうことは物語ってくれる。また、あまり知られていないが、カレン州のポー・カレンにはモン文字に基づくカレン文字 (仏教ポー・カレン文字) があり、現在かなり普及している (Maankyak Uttama [1984]などの出版物もある)。この文字はポー・カレン人たちが仏教文書を見葉で作る際に使用した文字で、現在見つかっている最古の見葉は、1851年に作られたとされるものである (U Phon Myint 1975)。この地域のポー・カレン語 (東部方言) には、比較的新しい時期に借用されたと思われるモン語語彙が非常に多い。このような比較的新しい時期のモン族との接触もカレン族の歴史を考える上で決して軽視できない。(なお、レーケー /E:kE/、タラコウン /t@l@kh@uN=/、プータキー /phu.t@khI:/ などのカルト集団はポー・カレンの住むこの地域で発生している)

5. まとめ

カレン語の東西方言の差異から見て、少なくともポー・カレンに関しては確実に、英領化の相当以前からデルタ進出が行われ、現在のポー・カレン社会につながる母体

は英領化の時点では既に完成していたと思われる。また、モン語からの借用を見るに、スゴー=ポー祖語の段階で既に、平地民族モン族との接触が少なからず行われていたことが予想される。これが本発表の結論である。歴史学的にも、Luce (1985)の見解だと、ビルマ語碑文の記述からカレン族はパガン時代(11c~13c)には既にビルマ中央平原に居住していた可能性があるという。つまり、カレン族の歴史を正しく理解するためには、カレン族を単に山地民族としてとらえるだけではなく、かなり早くからデルタに進出していた可能性が高い（つまりカレン族は"平地民族"である！）という観点、および、相当早い時期から平地民族のモン族と関係を持っていたであろうという観点などを取り入れていかねばならない。特に、ビルマにおける民族間関係の中でも最も険悪とされるカレン=ビルマ関係は、飯島(1974)のような「山地民族カレン VS 平地民族ビルマ」という単純な構図の描き方だけでは到底正確に把握することができないだろう。英領化以前から平地におけるカレンとビルマの関係が始まっていたことはほぼ確実なのだから。また、その関係を考えるとき、カレン=モン関係というデルタ地帯における「古参」同士の関係を見捨てることは決してできないと思われる。

カレンとビルマは、本当に、飯島(1974)が言うように「無関心」でいられたのだろうか？少なくともカレンの側にとって、「新参」のビルマは本当に「無関心」でいられるような相手だったのだろうか？

#### 発音表記

子音（注意を要するもののみ）

(Pwo 東部方言)

T [t] ' [ʔ] s [c] g [ɣ] R [ɽ] b [β] d [d̪] ny [ɲ] N [ʎ]

(Pwo 西部方言)

T [t] ' [ʔ] sy [c] sh [sʰ] g [ɣ] R [ɽ] B [b] b [β] d [d̪] ny [ɲ] N [ʎ]

(Sgaw)

H [h]

#### 母音

(Pwo 東部方言)

i y [i] u [u]

I [i] U [u]

e @ [ə] o

E [e] a O [ɔ]

(Pwo 西部方言)

i y [i] v [w] u [u]

e @ [ə] o

E [e] a O [ɔ]

#### 声調表記 (Pwo 東部方言・Pwo 西部方言共通)

: [55] = [22] \_ [11] . [51]

引用文献

- Bauer, Ch. (1992) "Mon-Karen contacts." ms. (distributed at the Conference of Sino-Tibetan Linguistics)
- 速水洋子 (1992) 「カレン族における周縁の力と宗教・社会変動」 『民族学研究』 57/3:271-291.
- 飯島茂 (1974) 「国民形成と少数民族問題－ビルマにおけるカレン族の悲劇－」 『アジア・アフリカ言語文化研究』 8:117-135.
- 加藤昌彦 (1995) "The phonological systems of three Pwo Karen dialects." *Linguistics of the Tibeto-Burman Area*, 18.1:63-103.
- \_\_\_\_\_ (1997) 「カレン人とその言語」 田村克己・根本敬編 『暮らしがわかるアジア読本 ビルマ』 pp.42-49, 河出書房新社.
- \_\_\_\_\_ (1998) 「カレン諸語」 新谷忠彦編 『黄金の四角地帯』 pp.62-70, AA 研.
- Luce, G. H. (1985) *Phases of Pre-Pagán Burma --- Languages and History*. Oxford: Oxford University Press. (1966年パリ講義に基づく)
- Maankyak Uttama မာန်ကျာ်ဥတ္တမ (1984) လိက်အင်းသံင်း: lai: 'aN:ToN: (処世訓)[ポー・カレン語文]. 38pp. Hpa-an.
- Matisoff, J. A. (1991) "Sino-Tibetan linguistics: present state and future prospects." *Annual Review of Anthropology* 20:469-504.
- 大野徹(1969,70) 「ビルマにおけるカレン民族の独立闘争史(その1～3)」 『東南アジア研究』 7(3):363-390, 7(4):546-570, 8(1):64-90.
- Purser, W.C.B and Saya Tun Aung (1922) *A Comparative Dictionary of the Pwo-Karen Dialect*. Rangoon: American Baptist Mission Press.
- 坂本恭章(1994) 『モン語辞典』 アジア・アフリカ言語文化叢書 29.
- 崎山理(1996) 「言語による先史研究」 宮岡伯人編 『言語人類学を学ぶ人のために』 pp.218-244, 京都:世界思想社.
- Stevenson, H.N.C. (1945) *Burma Pamphlets No.6. The Hill Peoples of Burma*. London: Longmans, Green & Co., Ltd.
- Thomas, W.L and J.F. Embree (1950) *Ethnic Groups of Northern Southeast Asia*. New Haven: Yale University Southeast Asia Studies.
- U Phon Myint ဦးဘုန်းမြင့်(1975) ဗုဒ္ဓဘာသာပိုးကရင်ပေစာသမိုင်း: bou'da.ba\_Da\_ po:k@yiN\_ pe\_za\_ T@maiN: (仏教ポー・カレン貝葉の歴史)[ビルマ語文]. 306pp. Rangoon: သပြေဦးစာပေတိုက် D@bye\_'u: sa\_pe\_dai'.